



TITLE:

脊椎炎を初徴とした骨髄性白血病 症例

AUTHOR(S):

松井, 明

CITATION:

松井, 明. 脊椎炎を初徴とした骨髄性白血病症例. 日本外科宝函 1958, 27(5): 1254-1257

ISSUE DATE:

1958-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206680>

RIGHT:

脊椎炎を初徴とした骨髄性白血病症例

慶応義塾大学医学部整形外科科学教室（主任：岩原寅猪教授）

松 井 明

〔原稿受付 昭和33年6月19日〕

A CASE OF MYELOGENIC LEUKAEMIA WHICH INITIAL SYMPTOM WAS SPONDYLITIS

by

AKIRA MATSUI

From the Department of Orthopedic Surgery, School of
Medicine, Keio Gijuku University
(Director : Prof. Dr. T. IWAHARA)

8 years old, girl who came to our clinic with chief complaint of backache. Impression was given as pyogenic spondylitis, because X-ray picture which revealed marked distruction of lumbal spine and absence of hemorrhagic diathesis, enlarged spleen in clinical examination. On blood examination, diagnosis of acute lymphatic leukaemia was convinced but final diagnosis was changed to acute myelogenic leukaemia in autopsy.

白血病に関しては1845年 Virchow が記載して以来、Neumann, Ehrlich を経て次第に体系づけられ、枚挙にいとまないほど数多くの報告がある。成人に較べると小児のかかることが多いと言われている。近年骨のレ線学的変化が注目されているが、我々は軽度の発熱、貧血に伴って腰痛を訴え、レ線学上腰椎の著明な骨変化をみ、その後の血液学的所見で急性リンパ性白血病と考えられ、剖検上急性骨髄性白血病であつた小児の1例を経験したので報告する。

症例：8才の女子

主訴：腰痛

家族及び既往歴：特記すべき事はない。

現病歴：昭和31年5月頃、上肢に白斑を認め、某医に手当をうけるも軽快しない。6月に学校で馬跳びをした時、友人に押しつぶされて以来腰痛を訴え、次第に増強し7月初め歩行困難となる。8月某医より脊椎カリエスと診断され、化学療法をうけるも軽快しない。8月9日慶大整形外科を訪れ、脊椎骨髄炎の疑いのもとに2日後入院する。

現症：体格中等度であるが羸瘦し、顔面は蒼白、顔

貌は軽度苦悶状である。脈搏規則正しく緊張度良好である。上肢に白斑を多数認める。眼瞼結膜は貧血性であるが瞳孔に異常はない。歯齦、口腔に変化はない。心、肺ともに理学的に異常なく、各所のリンパ腺腫脹も認められない。肝は触知し得ないが、脾はその下極をふれる。頸部強直なく、下肢腱反射は正常で病的反射はない。腸骨窩に抵抗はない。脊柱は硬直性で、胸腰移行部は亀背を呈し、腰椎Ⅱ、Ⅲ附近は著明な叩打痛が証明される。右脛骨には一般に軽度の圧痛があるが、胸骨その他骨に著変はない。

レ線学上所見 腰椎は全般にわたり影像薄く、輪廓、影像共に不鮮明、不規則で、椎体は著明に圧潰され、特に腰椎Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに於て著しく亀背を形成する。椎間は著明に拡大している（図1, 2）。両下腿骨も影像稍淡く、顕著な変形はないが、骨幹端に於て輪廓やや不鮮明で、影像不規則で、骨梁構造も不明瞭で、尚骨端線に平行した夫々1条の陰影稀薄化した横走帯を認める。骨端線に接する部分に於ては骨陰影はやや濃厚である（図3, 4）。

入院当初の諸検査成績

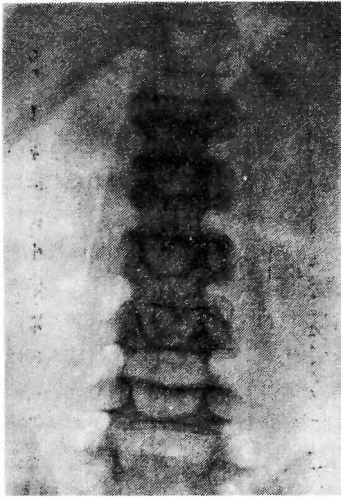
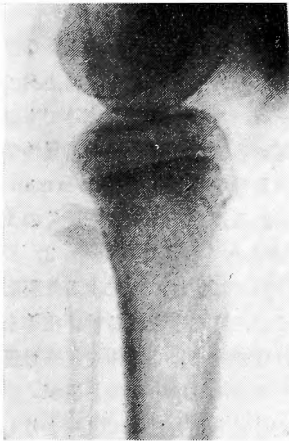


図 1



図 2



(左) 図 3



(左) 図 4



血液所見 赤血球 261 万，白血球 39,500，血色素50%，血色素係数0.96，血液像は中性嗜好白血球分葉核0，桿状核1%好塩基球，好酸球共に0，単球3%，正常型リンパ球13%，幼若細胞81%，血沈値93mm，マンロー反応陰性，ペルオキシダーゼ反応陰性

尿所見異常なく，ベンスジョンズ蛋白体も証明しない。

尿所見も異常なく，潜血反応も陰性である。

入院後経過 入院当初骨髄炎の疑いのもとに化学療法を行い，体温も比較的安定し37°C程度で小康を保ち，食欲も比較的良好であつたが，以上の諸検査成績より急性リンパ性白血病の疑いが濃厚となり，補液，輸血を開始するに，10日目頃より39°Cに及ぶ不規則な弛張熱が持続し，注射部位よりの出血傾向を認める。20日目頃より肝，脾腫大し容易に触知し得る様になり（図5），体位の変換も疼痛のため困難になる。ウレタン療法を開始するも，末梢白血球は著明に増加し11万を数えるに至り，骨髓穿刺を頻回に行うも不可能。35日目歯齦出血，ついで眼球結膜出血を認め，出血時間は著明に延長し1時間50分以上となる。ヘマトクリット値は14%を数えるにすぎない。37日目には血尿，口角よりの出血，眼底の動脈出血を認め，ルンベルレーデ反応も強陽性となり，大腿部に多数の出血斑を生じ，尿の潜血反応も強陽性となる。白血球は125,800を数え，ヒソ剤，ハイドロコチゾン，KCl療法を行うも軽快しないまま，41日目遂に他界する。

病理解剖所見 主な解剖学的変化は白血病性細胞浸潤を伴う過形性骨髓，肝腫大(2倍)，脾腫大(10倍)，腎腫大2.6倍，全身淋巴腺腫大等であり，他臓器への白血病性細胞浸潤

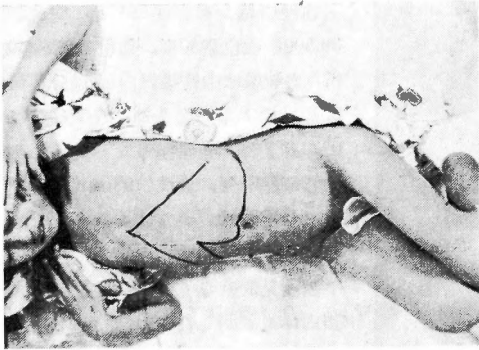


図 5

は心、両側肺、脾、胃、大腸、扁桃腺、胸腺、卵巣、子宮、膀胱等に見られる。腰椎ⅠからⅣに及ぶ部分と後腹膜淋巴節との癒着が見られ、同腰椎は白血病性細胞浸潤による緻密質の吸収像が見られる。又両側腎盂に大量出血、諸々の臓器の点状、斑状出血が見られる。肝の中心脂肪化があり、中等度の肺水腫をみる。大腿骨は淡褐色で、骨幹部1/3は著明に蒼白で、骨髓は泥状を呈し、所々に小出血点がある。脊椎も同様蒼白で小出血点を認める。

組織学的に骨髓は細胞が著明に増生し、結節の形成は認められない。これらの細胞は病的に増殖した骨髓芽球乃至前骨髓芽球で、骨髓球、後骨髓球、好中球等が少数見られ、好酸球は殆んど見られない。赤血球はその数が極めて減少しており、正赤芽球等は殆んど見られず、ごく少量の骨髓巨核球が見られる。骨皮質及び周囲組織にも白血病性細胞の浸潤があり、特に腰椎部では著明で、骨の破壊像が見られ、更に骨組織が認められないで連続性に周囲組織に細胞が大量に浸潤している。以上の所見により急性骨髓性白血病と診断する。

細菌学的所見 肝、脾、血液等からともに血液寒天培地にて黄色ブドウ球菌を多数認める。

考 按

白血病に於ては初発症状として、胸痛叩打痛、圧痛が多くものに見られ、他の骨における疼痛は比較的少ないと言われるが、本例は腰痛を主訴として来院し、レ線像上腰椎に骨破壊像を認め、当初臨床的に出血素因、口腔変化、脾腫等の諸徴候を欠如していたため脊椎の骨髓炎と思われ、血液学的検査ではじめて急性白血病と診断されたものである。リンパ性か骨髓性かの決定は、のそ幼若細胞が骨髓芽球か幼若リンパ球

かの鑑別が極めて困難なことがあるというものの、我々は之を幼若リンパ球と見なし、尚かつ酸化酵素反応が陰性のためリンパ性と考えていたが、剖検の結果、初めて骨髓性であることを確認したものである。

骨のレ線学的所見については、1901年 Jaksch が最初に報告しているが、骨変化が強調され始めたのは比較的近年のことで、骨病変は小児においてはさして稀でないと言われる。1935年 Craver, Copeland は小児白血病においてレ線上骨変化を認める例は7%というも、Baty, Vogt は70%に、Silverman は50%に、Dale は72%、Landoll は75%に、Joffe は成人では10%程度であるが、小児では60%に見られたといい、Karpinski は初期には66%であつたが、その後の経過観察により81%に認めたと言う。好発する部位としては大腿骨、下腿骨、骨盤、胸骨、頭蓋骨、中手骨、尺骨、下部脊椎等があげられ、長管状骨に圧倒的に多いが、時に脊椎に初発することもある。

Karschner 例などの如く骨髓炎を思わすような症例がまま文献上に散見し、その他先天梅毒、壊血病、クル病、多発性ミユローム、ユーイング腫瘍等でも似たような変化をレ線上認めることがある。非特異性ではあるが、白血病における骨病変として Silverman は1) 比較的早期にみられる長管状骨々端部近くの1~7mmの狭い両側性にみられる稀薄な横走帯 2) 最も頻度の多い骨破壊像 3) 新生骨添加による骨膜肥厚 4) 一般的ではなく尚末期にみられる骨硬化等をあげている。本例はこれ等の内1), 2) の変化を具備している。横走帯に関しては本態は不明であるが、他の栄養障害にもとづく疾患にも見られることよりして、非特異性の変化であり尚又最も成長旺盛な部位にみられる事実等より、Dale 等は内軟骨々化過程の障害像と考え、かつ膝関節附近のレ線所見を強調重要視している。

骨の病理所見として Snelling 等は 1) Infiltration 2) Rarefaction 3) Proliferation 4) Degeneration 5) 出血 Hemorrhage 等をあげているが、本例には著明なる白血病性細胞の浸潤による骨破壊を認める。

以上整形外科的愁訴として重要な腰痛を初発症状とした興味ある症例と思う。

御指導、御校閲をいただいた岩原教授に深謝致します。

(本論文の要旨は第250回整形外科集談会東京地方会にて演述した)。

1) Baty & Vogt: Am. J. Roent. Rad. Therap. **34**, 310, 1935. 2) Craner & Copeland: Arch. Surg. **30**, 639, 1935. 3) Dale: J. Ped. **34**, 421, 1949. 4) Jaksch: Ztschr. f. Heilk. **22**, 259, 1901. 5) Karpinski et al: J. Ped. **37**, 208,

1950. 6) 仲川: 日本外科宝函, **23**, 551, 1954. 7) 小川: 整形外科, **8**, 246, 1957. 8) Silverman: Am. J. Roent. Rad. Therap. **58**, 819, 1948. 9) 笹島: 整形外科, **2**, 291, 1951.

Gynecomastia の 2 例

京都大学医学部外科学教室第2講座 (主任: 青柳安誠教授)

越 哲 也・袴 田 文 治

[原稿受付 昭和33年6月19日]

TWO CASES OF GYNECOMASTIA

by

TETSUYA KOSHI and BUNJI HAKAMADA

From the 2nd Surgical Division, Kyoto University Medical School
(Director: Prof. Dr. YASUMASA AOYAGI)

The present paper reports the two patients with gynecomastia.

Case 1. 25-year-old male. At the age of 18 indolent swellings were noticed in both breasts. Though, on the right side, the swelling disappeared without any treatment, it gradually developed on the left side presenting an appearance of virginal mamma. The lesion was histologically gynecomastia accompanied by duct cancer of the male breast.

Case 2. 25-year-old male. About one year ago, a tumor of nut-size appeared in the right breast. In the past 4 months, it gradually enlarged and appeared as if it were a virginal mamma. Histological examinations disclosed gynecomastia. In this patient, because barba, pubes, and hirci were all sparse and the distribution of the pubes was feminine, an endocrinological disturbance was suspected.

As the causative factors of gynecomastia, the hormonal imbalance in which estrogen plays an important part and the sensitivity of the breast epithelium are assumed. However, at present, no decisive conclusion has been reached as to the details of the causative mechanism.

ま え が き

Gynecomastiaに関する研究、報告は、欧米に於て近年増加の傾向をたどっているが、我国に於ける本症に関する報告は従来極めて少なかった。併し近年にな

つてややその報告をみる様になつてきて、われわれも又最近、外観上 Gynecomastia と思われる 2 例を経験したので、若干の考察を加えて、ここに報告する。

症 例